

# 歴史資料館だより

## 歴史は、未来のために

聖隷歴史資料館館長 長谷川 力

「聖隷」は、草創期から筆舌に尽くしがたいほどの困難を克服してきた歴史を持っています。今日では、到底計り知ることが出来ないほどの苦難を耐え抜いて、歴史をつくってきた青年たちを支えた精神はいかなるものであったのだろうか。その精神は、青年たちに具体的にいかなる実践をさせたのだろうか。

今回、聖隷クリストファー大学に歴史資料館を整備するにあたって、  
第一に、創業以来、そしてこれからも変わってはならない基本的精神を明確に示そうということを決めました。

第二に、その精神の実践をしたことと事実を確認するために、出来るだけ多くの資料を集める努力をいたしました。

第三に、事業の推進を実践した人々に協力をしてくれた人々と、反対運



動をする人々が出てきましたが、どのような人々がどんな考えを持つようになり、どのような行動をしたのか、十分に研究できるようにしなければならぬと考えました。

第四に、特に事業の危機を救ってくれた二度の出来事、全国のクリスマスから贈られた一坪献金と、昭和一四年のクリスマスに突然贈られた天皇陛下からの御下賜金について、多くの人に知っていただき、創業者長谷川保が「神の御手はギリギリの時に働きたもう。」とよく言ってい

発行者 聖隷歴史資料館

〒四三三-八五五八  
浜松市三方原町三四五三  
聖隷クリストファー大学二号館二階  
TEL 〇五三(四三九)一四一六  
FAX 〇五三(四一四)一一四六

たことを知っていただきたいと思いました。以上のことは、これからももっと多くの資料収集と研究がなされなければならないと思っています。しかし、歴史資料館であつて研究者に提供すべきテーマは、もっと沢山あります。

聖隷集団の各法人が取り組んできた開拓的・創造的事業が、ついに議会や行政を動かし、法制度を作り出し、手段方法を改善させたケースは数えられないほどにあります。

開館以来、ブラジルとインドの「希望の家」についての展示コーナーだったところに、今月から「十字の園」の特別展示が始まりました。「十字の園」は、まさに前述の開拓的・創造的事業であり、日本の老人福祉法を生み出し、その中に特別養護老人ホームの制度を規定させる力となったのです。この歴史を知っていただくと共に、この事業の中心になったドイツ人ディアコニッセのハニ・ウォルフ姉妹の大胆で、かつ細やかな愛情深い取り組みについての証言などの記録を残さなければなりません。たとえば、ハニ姉妹は「十

字の園」の設計にも細心の注意をし、自ら日本の老人たちの男女別平均身長を調べてベッドや洗面所の高さなどについて要求したと聞いています。信仰心と科学的な配慮は、これからの聖隷の仕事にも十分に留意されなくてはならないことです。こうした聖隷の歴史の中に沢山ある未来に伝えられるべき具体的実践の事実を多くの人に協力していただいで収集し、整理し、記録して充実した歴史資料館を創っていきたく願っています。聖隷集団の未来を負ってくれる人々が、常に時代の課題に対する先見性を持ち、開拓的・挑戦的に、医療・福祉・教育のすべての分野で隣人愛の熱い実践をしていただくために、聖隷歴史資料館から大いに学んでほしいと思います。

### ◆聖隷歴史資料館のご案内◆

**開館時間** 一〇時～一七時  
(展示をこゆっくりご覧いただけるよう一六時三〇分までにご入館下さい。)

**休館日** 土・日、祝祭日及び  
聖隷学園の休業期間

聖隷集団の各法人・施設の職員、入居者の皆さんは、時間外や休館日であっても入館できます。時間外や休館日に入館希望の方は、予めお問い合わせ下さい。

## 歴史資料館の二冊の聖書

学校法人聖隷学園理事長 長谷川 了



聖隷の先輩たちは聖書に出会い、聖書を学び、キリストに出会い、主に従いました。医療・福祉・教育の聖隷の事業は教会の愛の業として始まりました。先輩たちはキリストの十字架によって罪あがなわれた者にふさわしい生き方をしたいと願い、主に従う人生を選択しました。それは聖書を学ぶ生涯であったともいえます。聖隷の土台であり根本は聖書です。このような経過から歴史資料館の正面に聖書が展示されています。

一九三〇年に結核の患者さんたちと運命を共にすることを決意して、長谷川保らはベテルホームを始めました。その時以来、事業を運営していく姿勢は一貫してイエス・キリストが弟子を訓練するために派遣した「マタイによる福音書第十章」の姿勢でありました。長谷川保はこの個所をエデンの園の聖書研究会で次のように解説しています。

七節に、「行って、『天の国は近づいた』と宣べ伝えなさい。病人を癒し…帯の中に金貨も銀貨も銅貨もいれて行ってはならない」とあります。長谷川保はこの「行って」の意味をギリシャ語では「ポレウオー

マイ」という、ポレウオーマイという言葉は、「旅に出る」「死ぬ」という意味があります。同時にまた「生きる」あるいは「生き方を知る」という意味があります。…ぬくぬくとしたところにならずに生きていてはいけない、そんなことしたら人生はだめになってしまふ、人生はそんなところではない、旅に出なさい、いつもそういうところを捨てて旅に出なさい。同時に、それは己に死ぬことであり、この世に死ぬことである。しかしその時に、本当の人生を、命を賜った人生の命を、二度と来ないこの人生を本当に生きることになる…。

長谷川保は衆議院議員として約二十年間働きましたが、高齢政治家の弊害を見て、早くから六十歳で政界を引退することを考えていました。六十才代前半で、一日も休みのない政治活動に明け暮れた政界を引退し

ました。引退後は日本基督教団全国信徒会会長となり、伝道講演活動のために全国の教会を訪問しました。研究者でない信徒としては広く読み込むことは難しいので、狭くても深く読むことに努力していたように思います。そのためにも、ギリシャ語で聖書を読みたいと考えて、まさに六十の手習いでギリシャ語を独自に学び始めました。聖書と一緒に展示されているのは長谷川保が使用した『新約聖書ギリシャ語辞典』（一九六四年刊）です。

長谷川保は、講演による全国の伝道と併せて浜松を中心とした教会と聖隷のクリスチャン後継者の養成を考えていたように思います。掛川市以西の西静分区の三十人近い教会の青年達が聖隷浜松病院の中に在った一軒の家に集まり、長谷川保の聖書講義を聴き討論をしました。これが全国から二〇〇人の青年を集めた、全国キリスト者青年浜松ワーク・キャンプに繋がりました。住まいを三方原エデンの園の近くに移してからは隣の恩賜記念館に青年を住まわせながら青年と共に毎朝、聖書の勉強会をしました。聖隷のクリスチャン後継者の養成を考えていたのだと思います。聖隷学園の事務局長、堀口路加さんは恩賜記念館聖書研究会の卒業生でもあります。

## 歴史資料館の四つの聖句（その二）

マタイによる福音書第十章五〜十節 イエスはこの十二人を派遣するにあたり、次のように命じられた。「異邦人の道に行ってはならない。…むしろ、イスラエルの家の失われた羊のところへ行きなさい。行って、『天の国は近づいた』と宣べ伝えなさい。病人をいやし、死者を生き返らせ…悪霊を追い払いなさい。ただで受けたのだから、ただで与えなさい。帯の中に金貨も銀貨も銅貨も入れて行ってはならない。…履物も杖も持って行ってはならない。働く者が食べ物を受けるのは当然である。」

弟子たちの足を洗うイエスの姿から、聖隷の創立者たちは人を受け入れ、愛し、仕えるという生き方を教えられた。神の奴隷となり、神から与えられた仕事に生きる決意を固めた。

彼らは、マタイによる福音書第十章五節から十節までの個所からも、経済面の方針に関して基本的なことを教えられた。聖隷が行うサービスはすべて「ただで与えなさい」ということである。

これは聖隷職員が無給料、無報酬で働くことを意味した。しかし、聖隷社が周囲から受けるサービスについては無料というわけにはいかないものが多い。渡邊兼四郎夫妻、園田繁草など、無料で往診し薬を与えてくれた人々もあった。しかし彼らも「外」から応援したのではなく、「仲間」となっ

## 十字の園特別展の見どころ、知りどころ

社会福祉法人十字の園 理事長 平井 章



聖隷歴史資料館の中に「聖隷グループ（体系樹）」のコーナーがあります。幹の根元に教会があり、次に聖隷福祉事業団、そして十字の園の枝が生えて、その枝から各事業の葉が茂っています。十字の園は教会の祈りの中から、新しい法人として生まれたのです。勿論、そこには聖隷から土地が無償で譲渡され、働き人も聖隷から送り出されたという事実があります。一九六〇（昭和三五）年春、定礎式に際してディアコニッセのハニ・ウォルフ姉妹は、「主イエス・キリストよ、あなたの御命令でこの家を建てますから、あなたがこの基礎となってください。」との祈りを神に献げました。そのことを、展示の中から見ていただき、知っていただきたいと思えます。

わたしは現在、日本キリスト教社会事業同盟の機関誌編集委員をしています。その中で同盟会員の法人・施設紹介のコーナーを担当しています。これまでに一二法人を紹介しましたが、いずれの法人も、『この最も小さい者の一人』（マタイ福音書二五章）との出会いから、キリストに先に救われた者が手を差し伸べたところから始まっています。ある法人は孤児であったり、障がい者であったり、婦人であったり、老人であつ

たりと出会った人は違いますが、その出会いからキリスト教社会事業として生まれ、育ってきています。

『小さい者の一人』にしたクリスチャーの業は、多くの小さい者への救いとなり、今日でも、その精神が受け継がれ、理念となっています。

十字の園の二五周年にて講演された西村ミサ先生の話は、「十字の園の出来るまで」の本になりました。また、三〇周年には、十字の園が出来てから以降の各施設の出来事や、十字の園の出来るまでのエピソードを盛り込んだ記念誌「夕暮れになっても光がある」が発刊されました。

現在、十字の園は四二年目を歩んでいます。職員の中には、ハニ姉妹と一緒に働いた人は一人もいません。初代理事長鈴木生二氏を知っている人も少なくなりましたが、歴史に刻まれた「十字の園の創立の心」、定款にある「キリスト教精神に立って」ということを、これらの本から受け

取り、そして受け継いでいきたいと思っています。また、今回の十字の園特別展の中でも、キリスト教精神に立つ「十字の園」を現していきたいと願い、企画してきました。

社会福祉事業の良し悪しを、利用者の顔と職員の顔で評価することがあります。良い施設には、利用者の笑顔と職員の笑顔があります。人生の最終楽譜を老人ホームで過ごしていることは、その人の人生設計の中では不本意なことでしょう。でも、その写真や記録の中に、老人ホームの中に生きている老人たちの喜びや希望が写っているのです。老人ホームに働く職員の喜びと希望が写っているのです。「主イエス・キリストがご自身の十字架によって神の国へ入る道を開いてくださいましたから、私たちが入ることのできる国は十字架の下だけです。そこには救いの希望があります。」と十字の園の命名の由来があり、聖書の「夕暮れになっても光がある」（ゼカリア書）のみ言に導かれているのです。

DVDコーナーでは、映像シナリオ「十字の園の出来るまで」を見ることが出来ます。また、鈴木生二氏、森本節夫氏などが写っている「御殿場の思い出」、浜松十字の園の懐かしい写真を連続に写し出す「十字の園写真帖」も見ることが出来ます。ハニ姉妹のドイツから持ってきたトランクや履いていたスリッパ、ハニ姉妹の印鑑、鈴木生二氏愛用の聖書、昔からのパンフレット類の展示品も一見の価値があります。

て「内」側にいた。  
衣食住の全般にわたって借金をしながら受けたサービスも多かった。これらは「ただ」で受けたものではなかった。しかしこれらの借金も、天皇陛下からの特別ご下賜金も含め、多くの人々からの献金によって返済できた。結局「ただで受け」、「ただで与える」という経営が貫かれた。もちろんこの間、聖隷達の苦労や心労は果てしなかった。その詳細は彼らの著作や証言に詳しく伝えられている。

長谷川保は七節の冒頭にある「行って」という言葉に注目した。この語の原語には「行く」、「旅に出る」という意味のほかに「死ぬ」という意味がある。長谷川保は「行って」を「己に死んで」あるいは「この世に死んで」の意味にとった。彼は結核患者に仕えて文字通り「野垂れ死に」することを人生の理想としていた。福音のため、イエス・キリストのために命を捨てることを理想としていた。このことから、果てしない苦労や心労を厭わず、それに耐えることができた。

彼が書き込みをした聖書が資料館に展示してある。マタイ十章の頁が開かれている。この「行って」の原語ギリシア語が余白に書かれている。彼が愛用した希和辞典のこの語の頁も開かれている。「（この世を去ってあの世へ）行く、逝く、死ぬ」という個所にも、赤ペンで下線が引かれている。

（佐柳文男）

◆映像資料の紹介

『神よ、私の杯は溢れます』や『十字の園老人ホームの出来るまで』などの著作には、一九五三年、五人のディアコニッセが二ヶ月の船旅の後、横浜埠頭に着き、長谷川保が迎え、横浜まで案内した時の様子が記されています。その時の記録映像が発見され、聖隷歴史資料館で公開できるようにになりました。また、一九五三年前後の聖隷保養園のひとコマを垣間見ることの出来る鳳来寺への遠足、運動会の映像をビデオに再編集してお見せすることが出来るようになった他、長谷川保・八重子夫妻が「創業期の苦労」や「これからの聖隷に期待するもの」を語っている映像、NHK教育テレビに出演した際の映像を約四十分のダイジェスト版としてまとめ、このたび公開できることになりました。長谷川保・八重子夫妻が語られるその言葉には時代を超えてなお変わらない真実と理念がこめられています。日々の忙しさに追われていると、「何のために聖隷の仕事が始められ、一人一人が何を大切にして仕事をしていったらいいのか」を忘れてしまいがちです。創設者のメッセージを映像を通して聞くことが出来るのはよい機会となるものと思います。とても懐かしく感じる方も多い映像だと思えます。ぜひ歴史資料館にお運びいただきご覧ください。

◆刊行物のご案内

長谷川 保著

『神よ、私の杯は溢れます』

本書は、『夜もひるのように輝く』の続編として、一九八三年にミネルヴァ書房から刊行されました。『夜もひるのように輝く』と同様、登場人物は仮名を用いており、内容はほぼ実録ですが、著者自身「記憶違いもあるかと思うので、小説としてお読みいただきたい。」と記しています。本書が執筆されていた当時は、ホスピス病棟が開設された頃で、ホスピス開設にかける著者の熱い思いがはじめにつづられ、引き続き著者のキリスト教信仰による愛の実践が回想としてつづられていきます。戦後、国会議員として全力を打ち込んだ憲法二十五条（生存権）と生活保護法の成立により、聖隷保養園の貧しい結核患者の入院治療費は全額国から支給されるようになり創設以来の経済的苦悩から開放されたこと、しかし戦災者を助けるために金はいくらあっても足らなかった様子、青少年の精神を教育して平和と人間を大切にすることを建設するために遠州基督学園を建てたこと、結核撲滅のために次々と新たな病棟を建て、新たな治療薬を導入し、自然療法から外科療法への移行に当たって肺外科の権威者、都築正男教授をお迎えしたこと、一九五〇年の公職追放解除により、再び政界に復帰して文教政策、社会保障制度の確立に尽力し

た様子、十字の園、聖隷浜松病院、聖隷看護婦養成所、予防検診活動、未熟児センター、エデンの園、日本老人福祉財団、ブラジル希望の家と発展していく記述を読みながら、それぞれの事業が何を願い、どうして始まったのかを改めて知ることが出来ます。新たな事業を始める場合、「この仕事を神様がやれとお命じになっているか真剣に祈ってみる。聞く、働く人があるかどうかを考えると、あるいは数年かけて人材を養成する、その資金を得る方法を考える。事態が急迫しているときは資金の備えがなくても仕事を始め、資金の与えられることを祈りながら仕事を進めていく。」そして「キリストの名において行うものは最善でなければならぬ。」という著者の言葉には時代を越えた真理があります。『神よ、私の杯は溢れます』は現在出版元も在庫切れの状態ですが、その他の著書とともに増刷の計画を検討中です。

◆歴史資料館入館者の声（抜粋）◆

資料館を見学すると、大学二号館新築に期を一にして資料館を充実移設した意義の重大さをつくづく感ずる。聖隷社創業から七十六年を経た現在、当時の同志あるいは従事者で壮健な方がおられたとしても全てを正確に表現することは実に困難なことであろう。一方、聖隷グループ自体も傘下の施設数二百余、職員数七千余名と巨大化し、草創期に患者の

お世話を始めた人たちの考え方や苦労の実態を遍く施設の末端、職員一人一人にまで我がこととして浸透させることはきわめて困難なことも容易に想像できる。この資料館の存在は「そうであってはならない」という聖隷中枢の強い意志表示として受け取ることが出来た。

「聖隷という名称は現代にあって語感が良くない。変えてはどうか」と、三笠宮が当学園を訪れた際にお話しになった由だが、今これを聴く耳は持たない。資料館を入った第一歩で全ての見学者はその名称の由来を物語る絵画「弟子ペテロの足を洗うキリスト」と対面する。そして長谷川保たちが自分たちの理想をかたる仕事を始めるに当たってつけた名称「聖隷」の意味を知る。この名称は、この事業体が社会福祉の仕事を実践する上での根源的な思想であり、背骨であり、拠りどころだ。

今後何が起ころうとも、「聖隷」の名称とこの資料館は残していかなければならないというのが見学の感想だ。（聖隷クリストファー大学社会福祉学部一年生）

◎引き続き、運営ボランティアを募集しています。

お申し込み・お問い合わせは、担当・高山までTELまたはFAXにてお寄せ下さい。お待ちしております。